

## 冬の通学介助ボランティアを募集して

人文学部臨床心理学科 4年 M, R

### 1. はじめに

私は、大学3年生の冬の季節を迎えようとしている2006年11月頃、通学介助のボランティアの募集に向けて準備をしました。

それまでは、大学3年生の春から募集したトイレ介助のボランティアや、ボランティアがない日は有料のヘルパーの方に、一人で車椅子を押して介助をしていただいていた。大学3年生以前は、車で送迎を頼める方がいましたが、様々な苦勞が伴ったことから、より身近にいる学生から力を借りたいと思い、ボランティアを募集するという方向を選びました。

大学3年生の7月までは札幌から通っていたため、ボランティアやヘルパーの通学介助は、大麻駅から大学までの間をお願いしていました。そして、9月以降は江別文京台で一人暮らしを始めたため、自宅から大学までの通学介助をお願いしました。

今回の冬の通学介助ボランティアの募集は、私にとって初めて行った試みです。雪が降ったり積もったりした道路で、車椅子を一人の介助者が押すのは大変になると思い、片道の通学に2～3人のボランティアを確保することを目標にしました。

そこで、人間科学科のM先生に主に協力をいただき、ボランティア募集や実際の運営に向けて準備をしてきました。また、バリアフリー委員会の車椅子学生代表であるS君や、ボランティア募集の機会を提供して下さった臨床心理学科のI先生も、今回の試みに関わっていただいています。

この度は、今後、私のように通学介助が必要な障害学生が大学に入学した際に、少しでもお役に立てていただけたらと思い、以上の冬の通学介助ボランティアの募集の試みについて執筆したいと思います。

### 2. ボランティア募集の段階

ボランティアの募集は、人手をできるだけ確保するために、多方面から行いました。

一つ目は、バリアフリー委員会の全体会で行いました。本学のバリアフリー委員会では、最近、車椅子の通学介助ボランティアも始めているため、他の2人の車椅子学生の通学介助ボランティア募集と共に行う方法でした。そこでは、車椅子学生代表のS君を通じて行いました。

二つ目は、人間科学科のM先生から、ご自身のゼミや講義に関わっている学生に声をかけていただきました。

三つ目は、私が関わっている江別の福祉事業所に募集の協力をお願いしました。その事業所には、放課後の障害児預かり支援のボランティアに、札幌学院大学の学生がいるため、その学生に私の通学介助ボランティアについて話をさせていただきました。

四つ目は、臨床心理学科のI先生に事情をお話ししたところ、講義で私自身がボランティア募集の宣伝をする機会をいただきました。

今回の募集は、以前から行っているトイレ介助ボランティアと別に行っているので、募集の対象を男女問わず行いました。紙面で、私が通学する曜日・時間を表し、いつ介助が必要なのかを伝えました。

その結果、バリアフリー委員会からは2人、M先生から紹介をいただいたのは4人、福祉事務所に関わるボランティアからは4人、I先生の講義の学生からは4人、合計14人のボランティアが最終的に集まりました。

### 3. ボランティアとの初めての顔合わせ

11月下旬までで13人、12月に1人のボランティアが集まりました。

はじめに、11月24日の昼休みに一度ボランティアに集合していただきました。その集合の連絡は、私やM先生がそれぞれ知っているボランティアに連絡をし、当日はM先生が進行してくださいました。S君も同席しました。

そこでは、どのような介助体制でお願いしたいのかという意向をお話し、ボランティアからの意見ももらいました。その意向とは、主に下記の4つです。

- ①特定の曜日・時間で担当するボランティアを決めたいこと
- ②各曜日・時間に対し、1番手、2番手、3番手…を確保したいこと
- ③時間をある程度決めていても、当日の用事の状態しだいで時間が前後しうることを
- ④自宅と大学までの通学では、トイレ介助ボランティア（女性）が付き添うことを基本に、通学介助ボランティアにはその補佐をお願いしたいこと

一方、ボランティアの一人から、「特定の曜日・時間で担当制にしても、いつでも代わりがいるような体制をつくってほしい」という意見をいただき、今後の参考になりました。また、多方面から募集したこともあり、個々人と面と向かう機会がなかったため、この機会ですと顔を合わせることができ、さらに、一度にお話しができるという利点がありました。集まったボランティアには、改めてM先生が連絡先を聞き、集まれなかったボランティアの連絡先は私が先生に教え、私もM先生もボランティアの連絡先を把握するようにしました。

その後、ボランティア全員への連絡はM先生が、特定のボランティアへの連絡は私が担当することになりました。

### 4. 介助体制をつくるまで

まずは、ボランティア一人ひとりに、介助に入れそうな曜日・時間の候補を挙げてもらい、定期的に頼めるかどうかの確認をしました。その結果、火曜日を除いた曜日は、行き帰りとも2人以上のボランティアの候補がありました。また、ボランティア一人ひとりに、候補を挙げてもらった曜日の講義の時間や、住んでいる場所などを差し支えない程度に聴き、ボランティアの介助をするにあたっての状況を把握することから始めました。そして、ボ

ランティアの状況を考慮することを心がけ、1番手、2番手、3番手…と私が考えました。

次に、通学介助の流れや車椅子の操作の仕方、私の自宅の場所を、実際の私の通学の時間にボランティアに覚えてもらうようにしました。それは、11月29日から1週間行い、各曜日の1番手だけではなく、それぞれの候補者全員に同行してもらう方法で行いました。また、お互いに自己紹介をしていただき、代わりとなるボランティアの顔合わせを行いました。

その1週間で、各曜日のボランティアの1番手、2番手、3番手…を徐々に確定し、M先生にそれを報告しました。そして、M先生からその旨を各曜日のボランティアに連絡していただきました。

#### 5. 通学介助の運営のための規則

介助体制ができ始めた頃、M先生のご提案で、以下の規則を私とボランティアで共有しました。

1. 1番手にあたっている人は、前日の20時までにRさんへ確認のメールをする。  
(例：明日の登校時／下校時介助に入りますなど)
2. 都合で介助に入れなくなった場合は、その旨Rさんに連絡するとともに2番手の介助者へ依頼する。
3. 2番手の介助者は前記同様確認のメールをする。3番手以降も同様。
4. 当日のキャンセルはしないよう十分注意する。万が一介助に入れられない事態が生じた場合は、前記同様の措置をとる。
5. Rさんが都合で登校しない場合は、前日の20時までに介助1番手、2番手…の学生にその旨連絡する。

その他に、予定の時間より遅れそうな場合も、お互いに連絡することを約束しました。

#### 6. 実際に介助に入ってもらって

候補者全員に同行してもらった後、本来の方法として考えていたように、基本的に1番手のボランティアに介助に入ってもらうことにしました。(行きも帰りもトイレ介助が必要なため、その介助ができるボランティアやヘルパーの付き添いを基本として、通学介助ボランティアにはその補佐として同行してもらいます。) 行きの通学は、私の自宅に来ていただいて大学まで、帰りの通学は、大学のどこかで待ち合わせをして自宅までの送りをお願いしました。

介助をお願いする前日に1番手のボランティアと連絡を取り合い、待ち合わせの場所や時間等の確認をしました。前述したように、1番手のボランティアが私に連絡をすると決めていましたが、実際に上記の時間までに連絡をしてもらうことが難しく、私から連絡を

することもありました。

実際の通学介助は、大学の後期期間の 2006 年 12 月から 2007 年 2 月の間にお願いしました。この期間は降雪量が少なく、一人の介助者でも車椅子を押すことのできる日が大半でした。しかし、気温が高いために道路の雪が溶けかかっている状態では、女性の介助者一人だけでは車椅子を進めることができなかつたため、通学介助のボランティアに同行してもらうことで、道路の状態が悪い事態になってもすぐに対処してもらえました。場合によっては、ボランティアの友人にも一緒に手伝ってもらえたこともあります。

また、帰りの通学では、自宅に到着した際に、雪のついた車椅子のタイヤを拭いてもらう作業が必要であるため、それは通学介助のボランティアに頼みました。一方で、トイレ介助のボランティアやヘルパーは女性なので、上着や靴等を脱がせてもらうなどし、両者の役割を明確にしてお願いしました。

問題や介助体制の変更があれば、M先生に報告しました。ボランティアに連絡が必要な時には、M先生からお願いしました。

#### 7. 今回の試みの問題点・改善点

以上の試みには、最初に思い描いていたようには、上手く機能できなかったことがあります。

それは、ボランティア同士の連絡の機能です。「5. 通学介助の運営のための規則」で記述したように、担当になっていたボランティアが介助に入れなない場合は、そのボランティアが私と次のボランティアに連絡するという方法を取っていました。それは、私が毎回ボランティアに連絡を取るという負担を軽減するために、M先生のご提案で決めた事項です。その事態になることは全体的に少なかったのも事実ですが、ボランティアが他の者になってほしい時には、私から常時頼んでいました。

この問題点には、①多方面から募集して集まったため、お互いに面識が薄いこと、②ボランティアは、私の力になりたいという目的は共通していると思うが、他のボランティアとの交流までは関心を持つことが難しいこと、などの背景があるように思います。また、それと関わり、ボランティアが介助に入れなない場合に、本人が気軽に相談できる状態をつくることが重要だと思いました。

#### 8. ボランティアと関わりを持つ上で大事にしたい点

大学 3 年生で初めてボランティアを募集し、そのボランティアと関わりを持つようになったことで、心に留めておく大事なことがあると思いはじめました。それは、「5. 通学介助の運営のための規則」で述べたような、活動のある程度まとめるための「規則」には、含むことが難しいことです。

その大事にしたい点とは、ボランティアがいることで、どのようなことが助かっているのかを、介助に入っていたらいるボランティア自身に直接伝えることです。つまり、

私の場合は、冬道の通学に付き添ってもらおうボランティアに、「雪道の状態が悪くても、より安全に通学することができる」ということを伝えるということです。

ボランティアは、介助が必要な人(ここでは私のこと)のために力になりたいと思って、ボランティアとして介助に入ってくれます。一方で、介助に入ってもらう時は、ボランティアにとっては、自分の時間を人に割いているのも事実です。

そのようなことがあるため、ボランティア自身に、「ボランティアとして介助する意義」をある程度理解してもらわないと、やはりボランティアは気持ちが落ち着かず、さらには苦痛に感じるのが普通だと私は思っています。そうすると、ボランティアは、手助けしたい気持ちと不安な気持ちと葛藤して、複雑な気持ちになるのだらうと思うのです。

それは、介助を頼む方も不安です。なので、そのような気持ちに悩まされた時、介助を頼む側も頼まれる側も互いに、その悩みを話し合える機会があった方が良いのではないかと考えました。

実際に、通学介助をしていただいたボランティアの方に、改めて聞いてみたところ、「自分が介助につくことで、どれくらい役に立ったのだらう」と話していました。確かに、今回の冬は、前述したように降雪量も少なく、基本的に介助につくトイレ介助のボランティアやヘルパーの方が一人で車椅子を押せることが大半でした。しかし、「もう一人、通学介助のボランティアとして介助についてもらうことで、途中でアクシデントが起きても、すぐに対処してもらえらるから安心だった」ので、そのことを話しました。

実は、そのお話は、一人のボランティアとの個人的な会話で出たことなので、他のボランティアにはその話はできませんでした。どのボランティアの方も、快く長くお付き合いしていただきましたが、「介助に入ってもらって安心」ということを皆に伝えた方が良かったのではないかと少し後悔しています。

このような経験から、「支援してほしいニーズがあり、それを頼む・頼まれる」のみでは、限界があるように思います。つまり、「支援される・するのが暗黙の了解になる」のではなく、「どうして支援を頼む・頼まれるのかを、あえて言葉にして互いに共有する」ということです。

それは、文章化することで、ボランティア運営のための規則にできるほど、単純なことではありません。しかし、だからこそ暗黙の了解に陥らずに、誰でも安心して「ボランティアをされる・する時間」を共有できるように、互いのコミュニケーションが必要になるのではと思いました。

## 9. おわりに

通学介助ボランティアを募集したことは初めてでしたが、大きな問題もなく、無事に毎日通学して、大学3年生の後期を終えました。この機会に、助けてもらいたいことを声に出して伝えれば、少しずつではありますが、声に応えてくれる方々がいるということを実感しました。さらに、様々な人との出会いもできました。

このようにできたのも、ボランティアはもちろん、準備や運営に携わっていただいたM

先生や I 先生、バリアフリー委員会の S 君などのご協力のおかげです。ありがとうございました。

#### 10. まとめ

最後に、以上の通学介助ボランティアの募集から介助体制作り、実際の運営までの流れをまとめて、私の執筆を終わりたいと思います。

